



能忍寺たより

行事紹介

○涅槃会(ねはんえ)

涅槃会とは、花まつりや成道会と並ぶ仏教の三大行事の一つです。二月十五日の涅槃会はお釈迦様が亡くなられた日とされ、お釈迦様入滅の様子が描かれた「涅槃図」を開き、お釈迦様を偲んだ法要が執り行われます。

お釈迦様の命日自体ははっきりとは特定されていませんが、上座部仏教ではヴァイシャーカー月(第二の月)の満月の夜に亡くなられたとされることから中国では二月が亡くなった月と伝えられるようになりました。このため日本でも二月に実施されることが多いです。旧暦を取り入れる三月に行う寺院もあります。

涅槃会は大切な法要の一つであり、普段見ることが出来ない涅槃図を見られる機会でもあります。また、お釈迦様の涅槃の様子からは現在のお葬式のしきたりも生まれています。奥深い仏教芸術に触れられる貴重な機会でもありますのでお近くの寺院で涅槃会が執り行われるときは、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

今月のことば

○随縁不変(ずいえんふへん)

「随縁不変」とは状況に応じて柔軟に対応しつつも、自分の本質は変えないという心の在り方を表す言葉です。この教えは、特に禅宗において重視されてきました。変化する環境の中で、いかに自分の心を安定させ、適切に行動するのか。これは禅の修行者にとって大きな課題であり、随縁不変の精神はその解決の鍵となる考え方です。元々は中国の禅宗で用いられるようになったもので、禅の修行では雑念に惑わされず心を安定させる力と状況に応じて柔軟に心を働かせる技術が求められました。この真理に基づいて行動する生き方こそが、禅僧たちの求める姿だったので。外界の変化に合わせてすぎず、自分らしさを持つて状況に合わせて表現するあり方を忘れずに過ごしたいですね。

○コラム あれもこれも仏教用語

○うろろうろ

「あてもなくあちこち歩きまわるさま」や「どうしたらよいかわからずに困り果てているさま」を指している「うろろうろ」という言葉ですが、仏教から由来する言葉です。「うろ」とは漢字で「有漏」と書き、様々な心の汚れを表す総称であるとされます。サンスクリット語では有漏を「saṃsāra(サーサラヴァ)」と書き「流れ出る」ことを意味します。有漏は私欲や迷いを引き起こす「六根(眼・耳・鼻・舌・身の五感と意識の六つを指す)」から漏れ出るものだと考えられ、「漏」は広義の「煩惱」という意味を含んでいます。人間の六根から煩惱が流れ出て心が惑う状態を「有漏」と言い、それが重なり「うろろうろ」と表現されるようになりました。一方で、流れ出る煩惱や汚れがない状態は「無漏(むろ)」と云います。

はじめての仏教

○四諦・八正道

お釈迦様は最初の説法である「初転法輪」において、苦諦・集諦・滅諦・道諦からなる四つの真理である「四諦」について説かれました。

「苦諦」とは人生は苦であり、思い通りにはならないこと。「集諦」とは人は物事が移り変わるものという真理(無常)を知らずに永久に変わらないものだと思ってしまうという、苦が集め興す原因に関する真理をいいます。この状態を「無明」といい、無常を知らない無明から欲望や執着が生まれ、これが叶えられないことから苦が生じるものです。これらの苦を滅した境地が「滅諦」であり、すなわち「涅槃」のことをいいます。煩惱の炎が吹き消された、仏教が目指す境地のことです。そして、苦を滅した涅槃の境地に至る道筋に関する真理を「道諦」といいます。お釈迦様はその道筋について、具体的に八つの実践の道である「八正道」として説かれました。

正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定として示される実践の道は、教えを正しく理解し考え、それらに基づいて日々の生活で良い行いを積み重ね、正しい修行に精進することとで悟りに至る道筋とされています。

苦諦により現状を見定め、集諦により原因を明らかにし、滅諦で目標を設定し、道諦によってそこに至る道筋を示すとしてお釈迦様は悟りに至る経路を示してくださっています。